

東アジアの世界遺産とアクセシビリティ探訪！

長城、故宮、スウォンファンソン+アジャンター石窟群

高橋儀平 | 東洋大学工業技術研究所、東洋大学 名誉教授

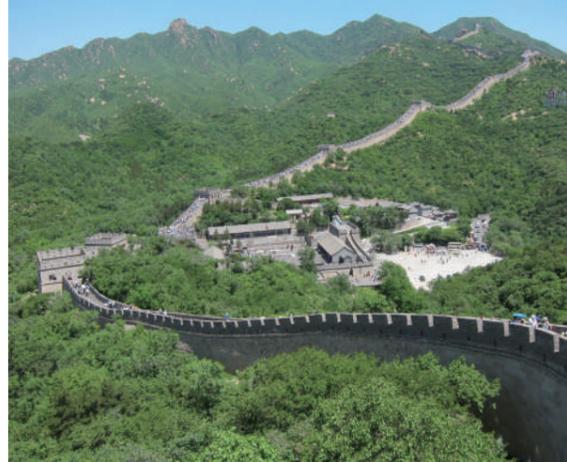


写真1 長城・八達嶺。長城は全長2万kmを超える世界最大の人口構築物。現長城の多くは明朝時代に造営され、1990年代以降修復が進んでいる。八達嶺の最高点は標高1,015m、1987年世界遺産登録

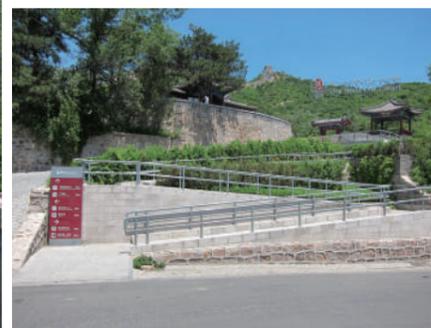


写真2(左) 八達嶺駐車場側からのアプローチ用傾斜路、**写真3(中央)** 慕田峪長城のロープウェイ。八達嶺より急峻な地形が多く、ロープウェイが便利、**写真4(右)** 八達嶺傾斜路前の案内サイン(2008)。英文と目的地までの距離が標準表示



東アジアの世界遺産とアクセシビリティ

筆者が東アジアのアクセシビリティに関心を持つようになったのは、米国や欧州に次いで東アジアでは進んでいるとみられる日本のバリアフリーやユニバーサルデザインが、どのように受け止められているかを確認したかったからであった。実際のところ、80年代から90年代にかけて、バリアフリー関連法制度ではシンガポールがわが国より先に進み、香港がこれに続いていた。公共交通機関のアクセシビリティではシンガポール、香港、台湾、韓国が先行していることがわかった。

一方、中国では2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博を契機に公共交通機関、都市施設、観光地や文化財、世界遺産のアクセシビリティが急速に推進された。韓国では日本よりはやや遅れてバリアフリー法制が成立したのであるが、法規制の進め方と公共交通機関の整備ではむしろ先行している。特に地下鉄駅のホームドア、多言語運行案内、多言語自動券売機、車両運行のデジタル化、駅のナンバリング表示等では日本より先行して進められた。2015年のインチョンアジア大会、2018年のピョンチャン冬季オリンピック大会を契機とした都市施設整備では、競技場や宿泊施設等で国際的なアクセシビリティ水準が展開した。表1はこの間の中国、韓国のバリアフリー法制の主な動きである[表1]。

中国のバリアフリー法制の動きと世界文化遺産のアクセシビリティ

中国におけるバリアフリー化の大きな転機は2008年北京オリンピック大会の開催決定である。北京オリンピック大会のメイン会場や周辺施設整備はもとより、地下

鉄、道路、主要商業施設や公共的施設のアクセシビリティや国内外の観光客を迎え入れる歴史的建造物や世界遺産のバリアフリー化が急ピッチで進められた。そして再び2022北京冬季オリンピック大会に向けバリアフリー法制度が改正・強化されており、都市施設のアクセシビリティが加速している。

長城(万里の長城)のアクセシビリティ

写真1は1987年に中国で最初の世界遺産登録の一つとなった長城(万里の長城)・八達嶺である[写真1]。明清の時代に現存する約6,000kmの長さになったと伝えられる。長城は急峻な地形に立地し、2008年以前も一部はその修復が行われていたが、2008年の北京オリンピック大会を契機に、さまざまなバリアフリー化や国際観光地としての整備が進められた。

表1 中国、韓国のバリアフリー法制化の沿革(BF…バリアフリー)

中国	韓国
84 身体障害者連合会がBF問題討議	87 建築法施行令改正(BF基準)
85 北京王府井ほかでBF化	ソウルオリンピック
89 身障者に配慮の都市道路と建築設計規範	88 障害者用駐車場の義務化1%
98 国家建設部BF監督強化	BF(便宜法)の義務化
01 道路と建築物のBF規範	94 地下鉄にEV設置始まる
02 BFモデル12都市の推進	97 BF法制定(保健福祉部)
04 北京BF条例	03 BF法改正(保健福祉部)
06 北京市障害保障法改正	交通BF法(国土海洋部)
障害者保障法改正…BF強化	06 BF認証制度(08施行)
08 BFモデル100都市	障害者差別禁止法(08施行)
北京オリンピック	13 BF法実態調査(5年毎)
10 上海万博	BF法改正、新築公共施設の認証制度義務化、BF適合検査の障害者団体代行制度、障害者用駐車場罰金強化
12 BF環境建設条例(國務院)	ピョンチャン冬季オリンピック大会
BF設計基準	
18 北京2022冬季オリンピック・パラリンピックBFガイド	18 BF法施行令強化 垂直型リフト(新築)、舞台の高差解消、観光ホテルBF強化3%
21 BF通用基準の強化、及び北京市BF環境建設条例改正検討中	19/2 BF法改正、案内表示基準
22 北京冬季オリンピック大会	19 BF法改正、BF認証義務対象の範囲拡大

アクセシビリティ確保の最大の難関は、急勾配の階段や傾斜路であるが、オリンピック大会に合わせて八達嶺長城と慕田峪長城では最低限の傾斜路化と、両長城には各2基のロープウェイが新設された[写真3]。筆者も以前は、車椅子使用者を車椅子ごと抱えたり(過去には大きなイベントでは人民解放軍が協力する場合もあった)、背負って登坂しているのを見たことがある。もちろん筆者自身も体験している。案内サインも適切に整備され[写真4]、メインゲートには車椅子が多数常備されている。ただ、地形の特性もあり、車椅子のまま移動できる距離は限られ、通路も選択できる水準ではない。世界遺産登録と同時に整備されたビジターセンターや駐車場エリアには車椅子使用者用トイレが整備されている。筆者は1974年に初めて長城を訪れたが、その後も北京を訪問するたびに時間があれば行きたくなる最高の名所である。

故宮(紫禁城)のアクセシビリティ

故宮は1406年(永楽帝)に造営が開始され、明・清時代には紫禁城と呼ばれた。世界遺産としては「北京と瀋陽の明・清朝の皇宮群」として長城と同じ1987年に登録され、中国最大の木造建築物である。現在は「故宮博物院」として公開されており、その表門が幾多の歴史を見届けてきた天安門である。

故宮は太和殿[写真5]、中和殿、保和殿の外朝とプライベートスペースとなる内廷に区分される。太和殿は紫禁城の最も重要な正殿で政治や儀式的中心舞台。創建は明時代の1420年である。写真5のように正殿前の月台へのアプローチは階段が大半である。しかしながら写真6に見られるように、周囲の広大な通路部分には緩やかな傾斜が確保されている[写真6]。この傾斜路が整備された時代は正確には不明であるが、近年になりさらに整備が進められたものと思われる。こうし

た傾斜路ルートの活用、新規リフトや加設床(鉄板)[写真9]の設置等によりアクセシブルルートが整備されている[図1]。アクセシブルルートは総面積72haを超える広大な敷地と各種建築物を基本ワンウェイで繋げている。エリアによっては既存の煉瓦タイル舗装で車椅子利用者やベビーカー利用者も通過しやすい状況がみられる。

特にアクセシビリティ整備でユニークなのは、太和殿の右隣にある中左門から太和殿の中心にある宝座(玉座)に至るルート上のリフトである[写真7]。リフトには景観に配慮して朱色の側壁を設け、遠方からは壁面に同化しリフトの存在がわからない工夫である。筆者も実際に近くに行くまでリフトの存在に気づけなかった。その



写真5 故宮の中心・太和殿



写真6 太和殿周囲の緩やかな傾斜路。アクセシブルルート確保のためレンガ素材は変えずに再整備

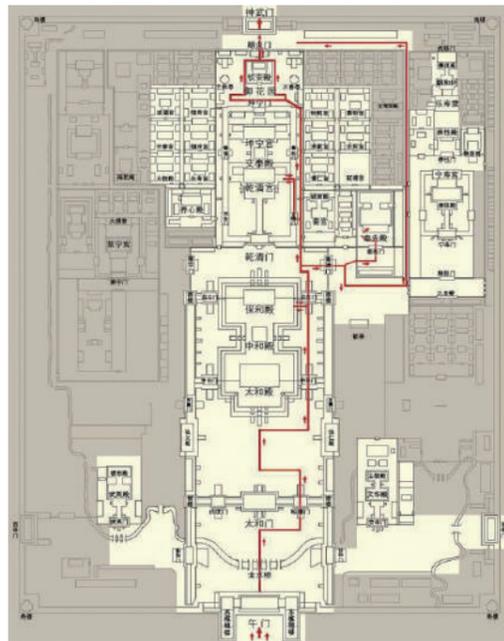


図1 アクセシブルルート。アクセシブルルート(赤色実線)はワンウェイではあるが、内廷側ではルートも記載以上に自由である(出典…故宮ホームページ)



写真7 (左) 太和殿のリフト(壁面に内蔵されたタイプのリフト)、(右) リフトの外側の二重壁



写真8 電動昇降機 写真9 鉄製仮設傾斜路

他、電動昇降機【写真8】や多言語の音声案内なども有料で用意されている。

韓国のバリアフリー法制の動きと世界文化遺産のアクセシビリティ

表1に見られるように90年代以降の韓国のバリアフリー法制も目覚ましい発展である。特に特徴的なのは良質なアクセシビリティを求めたバリアフリー認証の受審義務化である。公共施設は認証制度に基づきバリアフリー基準の適合について第三者評価を受けなければならない。また、5年ごとに行われるバリアフリー対象設備・施設の全国実態調査に基づき、バリアフリー

法の運用状況が把握され、次のバリアフリー法や整備基準改正の根拠が議論されていることも大きな特色である。法や整備基準(規則)の改正が毎年のように行われているのもしっかりした調査データが存在するからである。文化財や世界遺産のアクセシビリティについても急速に整備が進められている。

水原華城(スウォンファンソン)

韓国の世界遺産ではソウルの宗廟や昌徳宮が有名であるが、本稿では1997年に世界遺産登録され、名称としても響きが良い水原華城を紹介する。

水原華城は、京畿道水原市に位置し、朝鮮王朝第22代国王正祖が1794年に築城を開始、1796年に完工した。総面積約130ha、長さ約5.7kmの城壁が取り囲む理想的な城郭都市と言われている。発達門はその中心に位置し、半月形の独特な形態をもつ【写真10】。水原華城は朝鮮戦争時代に多くの損傷を受けたが1975年から79年にかけて修復、復元工事が行われた。筆者はその城郭都市の形状に以前から魅せられていたが訪問の機会がなく、漸く2017年12月に初めて見学した。

水原華城は東西南北四方向に城門を有し、北門に長安門、南門に八達門、東側に蒼龍門、西側には華西門がある。ソウルから車で1時間弱という人気の観光スポットでもある。写真11は近年整備された城壁への登坂路【写真11】、写真12は公衆トイレ(車椅子用便房)で【写真12】、隣接してベビーケアルームがあり日本語での説明もある。

城内のほぼ中央には華城行宮(ファソンヘンゲン)【写真13】が復元されている。華城行宮は水原華城全体の復元工事と並行して、2003年に一部公開、2010年に工事が終了している。華城行宮は観光地の完全復元施設ということもありアクセシビリティは徹底している【写真14~16】。『チャングムの誓い』等人気ドラマのロケ地として日本でもよく知られている。

インド・アジャンターのユニークなアクセシビリティ

インドもまた世界遺産の宝庫である。写真17はインドマハーラーシュトラ州北部アジャンター石窟群である【写真17】。紀元前1世紀から紀元5世紀の開窟と推定されている。1819年英国人士官ジョン・スミスが虎狩りをしていた際逃げ込んだのが石窟群発見につながった話

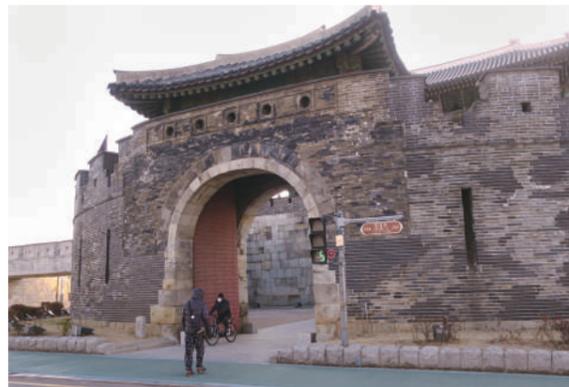


写真10 水原華城 発達門(南門)



写真11 整備された城壁への登坂路



写真13 華城行宮(新豊楼)



写真12(左) 車椅子使用者トイレ、写真14(右) ハンズオンタイプの立体案内



写真15(左) 貸出用車椅子、ベビーカー置き場、写真16(右) 通路の木製傾斜路。日本の寺社仏閣等の処理と同様

は有名である。約550mに渡り湾曲する川に沿って大小30の石窟群がアップダウン状に並ぶ姿は絶景である。1983年に世界遺産登録された。この険しい地形に対応して高齢者や歩行困難者の観光客には椅子かごポーターが待機している【写真18】。料金は日本円で約3,000円/回で利用される人も多い。じつは、日本でも古くから街道筋には山かごがあった。香川県の金比羅宮参道の石段かごは2020年1月まで営業していた。



写真17 アジャンター石窟群の全景



写真18 椅子かごポーター



たかはし・ぎへい
東洋大学名誉教授。1948年生まれ。東洋大学工学部建築学科卒業。博士(工学)、一級建築士。20代の中頃から障害者の生活環境問題に関わる。さいたま新都心(1997年)、ぬまづ健康福祉プラザ(2006年)、新国立競技場ほか東京2020大会競技施設等のユニバーサルデザイン指導。著書『さがしてみようまちのバリアフリー』(2011年)、『福祉のまちづくり・その理念と展開』(2019年)、『心のバリアフリーを学ぶ』(2020年)など

おわりに

北京では今、2022冬季オリンピックに向けてバリアフリー法による都市施設整備の加速化がみられる。韓国のバリアフリー法やガイドラインも近年一段ときめ細かな動きがみられる。観光地、文化財のアクセシビリティも徐々にではあるが確実に改善されている。国や地域、歴史と文化、地形や構法等にも十分に配慮しながら、年齢、国籍、能力、性的指向等に拘わらずすべての人が平等に歴史的建造物を見学でき楽しむことができること、そのことが文化財、世界遺産のレガシーであると言いたい。

主な参考文献

- 高橋儀平「日本・中国・韓国のバリアフリーの沿革と基準の標準化」(日本福祉のまちづくり学会全国大会、2014年)
- 高橋儀平「日本・中国・韓国におけるユーザー参加のバリアフリー環境に関する研究——韓国バリアフリー法の改正について」(日本福祉のまちづくり学会全国大会、2016年)
- 高橋儀平「日本・中国・韓国におけるユーザー参加のバリアフリー環境に関する考察」(日本福祉のまちづくり学会全国大会、2017年)
- 高橋儀平「歴史的建造物のアクセシビリティ考」(福祉のまちづくり研究、第18巻、第3号、60-63、2017年)

写真…すべて筆者撮影